

上福岡市内主要遺跡

- 1 西遺跡
- 2 北野遺跡
- 3 川崎遺跡
- 4 川崎横穴墓群
- 5 ハケ遺跡
- 6 上福岡貝塚
- 7 権現山遺跡
- 8 滝遺跡
- 9 長宮遺跡
- 10 松山遺跡
- 11 富士見台横穴群
- 12 南台1丁目遺跡
- 13 駒林遺跡
- 14 駒林中世墳墓



第1図 遺跡位置図 (1/15000)

I 調査に至る経過

武蔵野台地の縁辺にあたる上福岡市域は、大きく標高16～18mの武蔵野段丘面と標高8～10mの立川段丘面の台地と標高6～7mの沖積地帯にまたがっている。沖積地は古東京湾として、縄文前期の海進時には海辺を形成していたことから、台地の縁辺に所在する縄文時代前期の上福岡貝塚などが著名であるが、それ以降の縄文時代前期の鷺森遺跡、同中期のハケ遺跡や西遺跡、古墳時代初頭の権現山墳墓群、古墳時代前期および後期の集落跡である滝遺跡、また奈良・平安時代の松山遺跡や川崎遺跡、中世以降の長宮遺跡なども知られている。一方、沖積地には自然堤防が形成され、弥生時代末から古墳時代初頭と奈良・平安時代の集落跡などの存在が県埋蔵文化財調査事業団及び上福岡市遺跡調査会が実施した伊佐島遺跡の発掘調査によって判明した。下福岡城山遺跡では、古瀬戸系施釉陶器や常滑窯産陶器が建物跡や井戸跡に伴って出土している。

このように、当市域には古来からの遺跡が数多く眠っているが、昭和30年代より今日に至るまで大規模開発や個人住宅建設などの小規模開発が行われ、遺跡の現状変更を余儀なくされている。そこで、当市では文化財保存事業費の国庫補助金を受けて各種の開発に対し、記録保存の発掘調査を17年間に亘って実施し、その成果を「埋蔵文化財の調査」と題して(1)～(18)まで刊行してきた。今年度は、下記の6遺跡12地点が調査の対象となった。これらの発掘調査は、市庁内関係各課と連絡調整をとり、農地転用や開発申請を受けて、遺跡に影響を及ぼすものに対して工事主体者と事前協議の結果実施したものである。また、遺跡の有無が判明していない地点についても同様に工事主体者と協議し、遺跡の有無を確認することを第一の目的として、県文化財保護課の指導を受けて試掘調査として実施した。

遺跡名・調査の種類	所在地	調査面積	原因	調査期間
1 権現山遺跡 試掘調査 第9次発掘調査	滝1-4-3	396 m ²	個人住宅建設	4/15～ 5/ 7
2 松山遺跡 試掘調査①	築地3-2-13、24一部	139 m ²	個人住宅建設	4/23～ 4/24
3 西遺跡 試掘調査 第2次発掘調査 第3次発掘調査	西2-2071-1 西2-2072-8 西2-2072-12	1146.26m ² 100.05m ² 111.24m ²	宅地造成 個人住宅建設 個人住宅建設	5/21～ 5/28 5/29～ 6/ 5 6/ 6～ 6/14
4 駒林遺跡 試掘調査	駒林字本町153-3、-4	231 m ²	個人住宅建設	6/10～ 6/13
5 川崎遺跡 試掘調査 第17次発掘調査	川崎字宅地添204一部	779.69m ² 130 m ²	宅地造成 個人住宅建設	7/ 8～ 7/12 7/15～ 7/23
6 長宮遺跡 試掘調査①	長宮1-2-16	348.52m ²	宅地造成	7/12～ 7/18
7 松山遺跡 試掘調査②	松山2-2-1	489 m ²	宅地造成	7/22～ 7/24
8 西遺跡 試掘調査①	西2-5891-3他	1400 m ²	プール改築	7/17
9 西遺跡 試掘調査②	西2-1827-2	47.42m ²	個人住宅建設	10/16
10 長宮遺跡 試掘調査②	中丸2-2-9他3筆	568 m ²	宅地造成	11/ 7
11 川崎遺跡 試掘調査 第18次発掘調査	川崎字宮脇148-3	198 m ²	個人住宅建設	11/11～11/12 11/18～11/25
12 長宮遺跡 試掘調査③	長宮1-2-4	794.16m ²	共同住宅建設	1/14～ 1/21

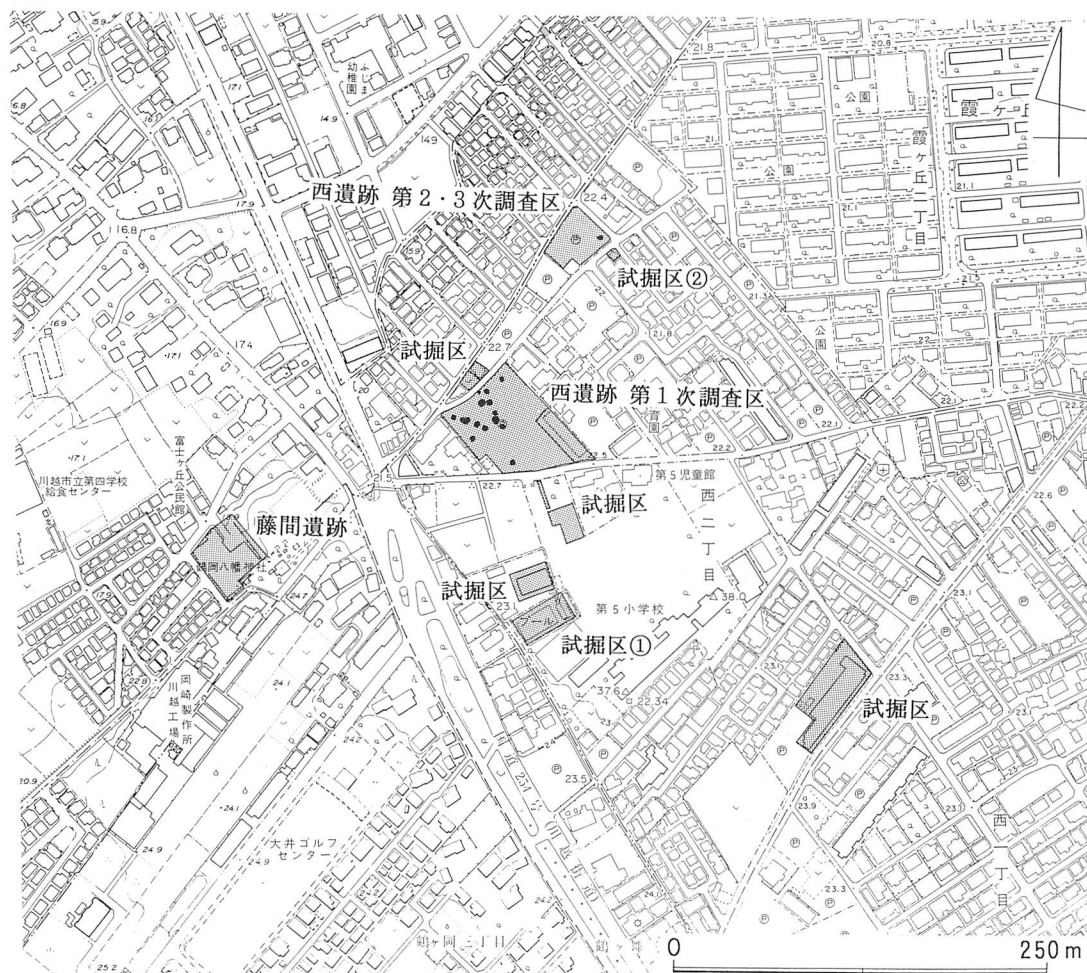
VI 西遺跡の調査

西遺跡は、北西側に東西方向に流れる川越江川を臨む武蔵野台地上に所在している。遺跡の北西側は急峻な傾斜面になっており、下方の平坦面は標高22mを測る遺跡の立地点に比べ、比高差は8m以上に及んでいる。西遺跡は1992年度に1次の調査を実施している。調査によって確認した遺構等は次のとおりである。

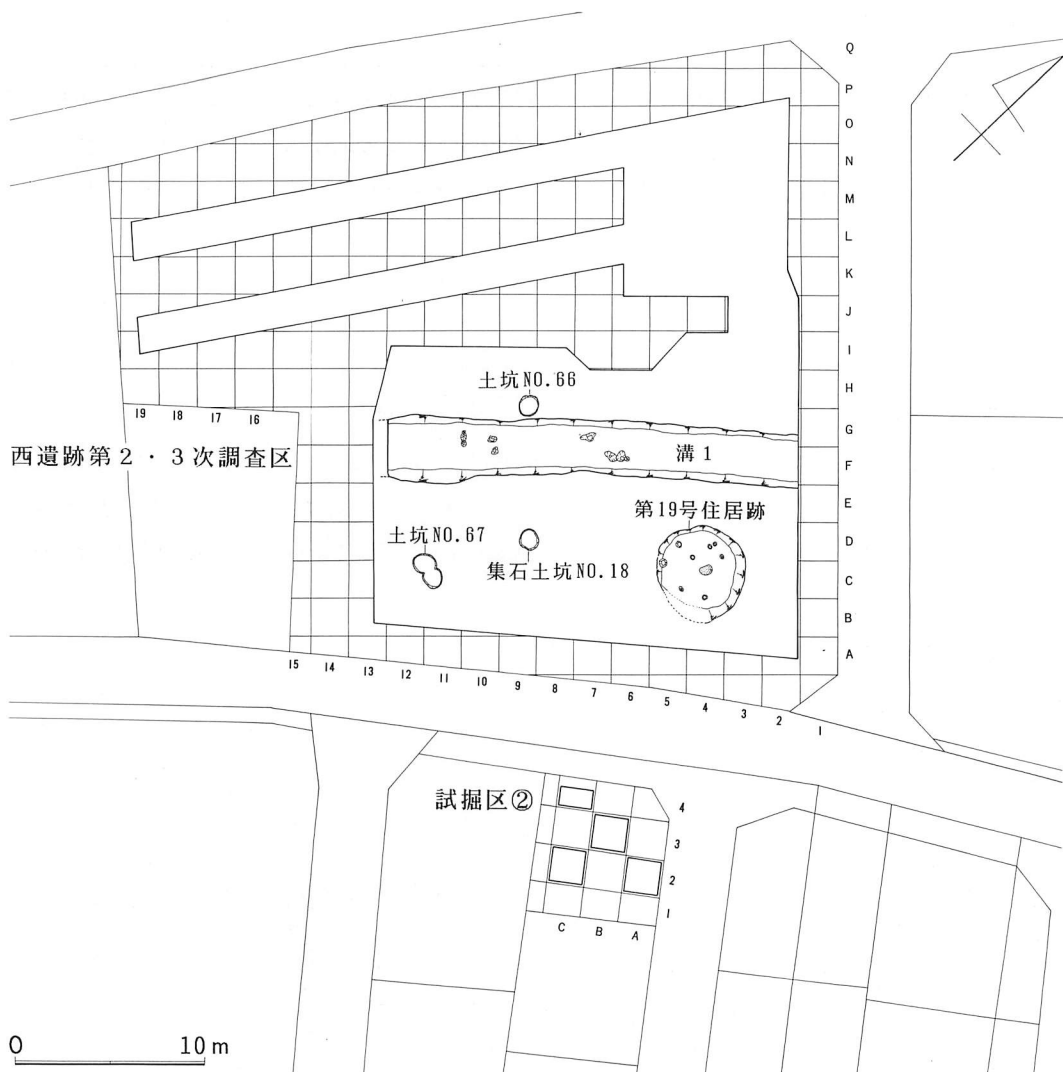
縄文時代中期（阿玉台・勝坂・加曾利E I期） 住居 17
土坑 65
集石土坑 17

西遺跡第2次調査

今回の調査区は第1次調査区の北東に位置し、北西側に下る斜面の際にあたる。5月21日調査区北西側の土地境界線を基準として南北方向に2m×26mのトレンチを2本、南東側の土地境界線を基準として東西方向に2m×15mのトレンチを5本設定した。トレンチの表土除去作業には重機を



第10図 西遺跡調査区位置図 (1/5000)



第II図 西遺跡第2・3次調査区・試掘調査区②全測図 (1/400)



西遺跡第2次調査
溝プラン確認作業風景 (西北より)

用い、ローム層に達したところで人力による遺構の精査を行ったところ、3～7トレンチから溝状遺構と4トレンチより住居跡と推定される遺構が確認された。そこで3～7トレンチの各間の表土を除去し再び精査した結果、溝及び住居の他、土坑が存在することが明らかになったため、5月29日より事業者の合意の上本格調査に移行した。

試掘調査によって確認された溝及び住居の平面プランを精査し、それぞれの覆土除去作業を開始した。6月3日から遺構の写真撮影、遺物の取り上げ、及び図面の作成を行い、6月5日にすべて

の作業を終えて、現地を撤収した。

〈検出された遺構〉

第2次調査により検出された遺構は次のとおりである。

縄文時代中期（勝坂期） 住居 1

時期不明 溝 1

■第19号住居跡

直径4m50cmの円形を呈す。壁は軟弱で掘り固められた様子が認められない。緩やかにカーブを描いて床面へと達する。周溝は設けられていない。主柱穴は4本検出された。深いもので深さ100cm、幅20cm、浅いもので深さ40cm、幅20cmを測る。床面の状態は壁と同様に軟弱であり、踏み固められていないようである。炉跡は住居のほぼ中央に一箇所検出された。直径30cmほどの地焼炉である。遺物は住居の中央北側から埋甕1固体が出土した。住居全体に攪乱を受けており、保存状態は劣悪であった。

■溝1

平均幅3mでほぼ一定しているが、西南部でややふくらみを持つ。深さは80～90cmで底面の幅はおよそ2mで平坦に掘られている。壁は60°の勾配で立ち上がる。傾斜角度が均一であり、東北－西南方向に直線的に築かれている。底面は水が流れた形跡は認められず、用途、時期ともに不明である。覆土は黒色土であり、覆土中より多数の縄文土器片や石斧4点が出土した。

西遺跡第3次調査

第2次調査終了後、先に記述した試掘調査によって確認された溝及び土坑の平面プランを精査しそれぞれの覆土除去作業を開始した。6月10日から遺構の写真撮影、遺物の取り上げ、及び図面の作成を行い、6月14日にすべての作業を終えて、現地を撤収した。

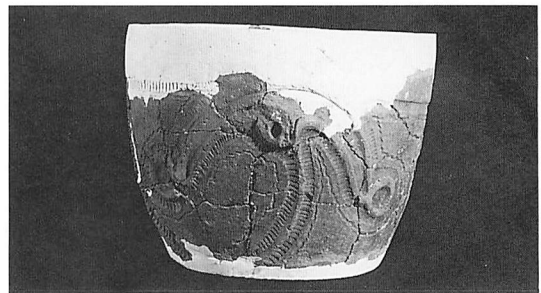
〈検出された遺構〉

第3次調査により検出された遺構は次のとおりである。

縄文時代中期（勝坂期） 土坑 2

集石土坑 1

時期不明 溝 1



西遺跡第2次調査

(上) 第19号住居跡全景（東南より）

(中) 第19号住居跡出土埋甕

(下) 溝1全景（北東より）

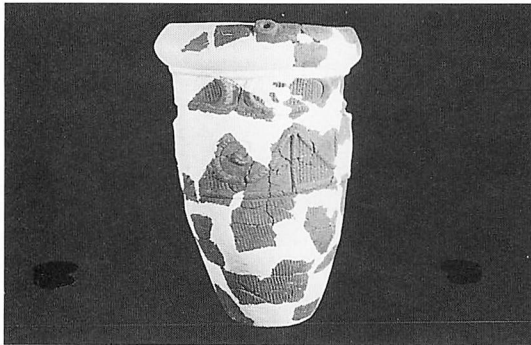


■土坑66

南北径 1 m 10 cm、東西径 1 m、深さ 28 cm を測る。底面はゆるいカーブをもち、壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は暗褐色土であり、この覆土中より縄文時代中期の甕 1 個体が破損した状態で出土した。

■土坑67

南北径 1 m、東西径 1 m 90 cm、深さ 20 cm を測る。底面はほぼ平坦で、壁は垂直に立ち上がる。覆土は暗褐色土であり、底面に近い覆土中より石斧 1 点が出土した。



■集石土坑18

南北径 1 m 5 cm、東西径 1 m、深さ 26 cm を測る。底面はゆるい皿状になっており、壁面も底面からゆるやかにカーブを描いて立ち上がる。覆土は暗褐色を呈し、その覆土中全体に礫が混入していた。また中央付近で炭化物がまとまって検出された。



■溝 1

西遺跡第 2 次調査で検出されたものと同一の溝である。調査区域外の東北—西南方向に更に直線的にのびているものと推測される。

試掘調査②

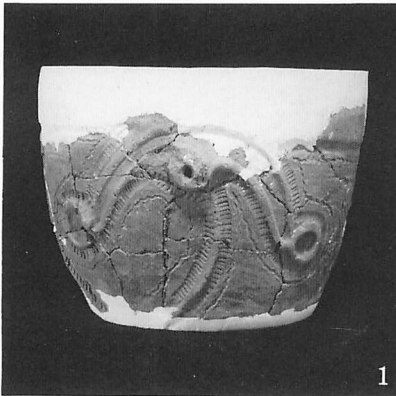
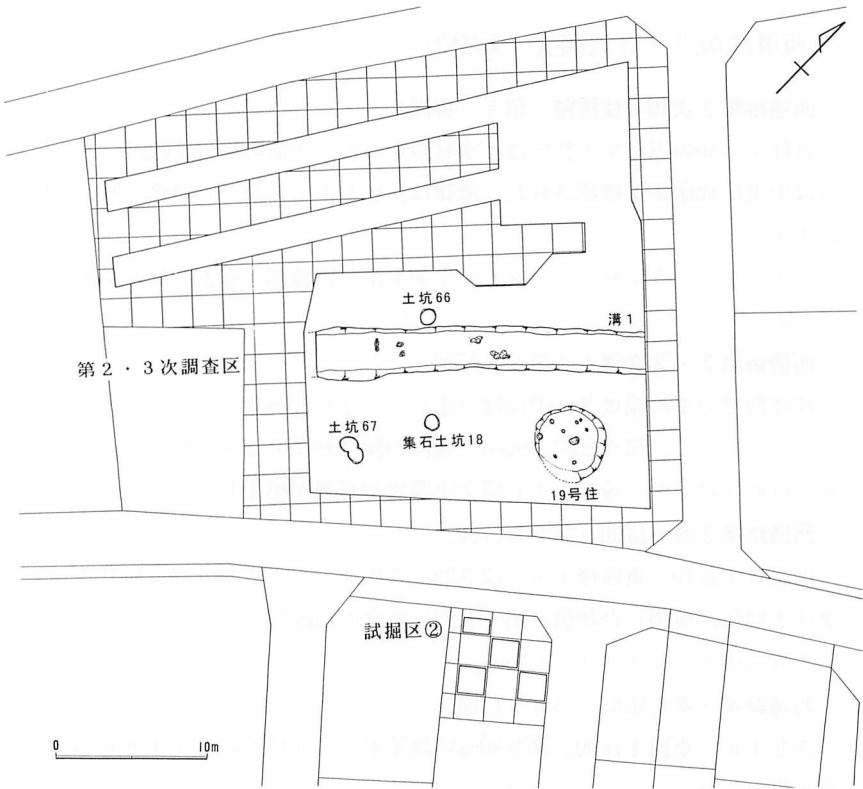
今回の調査区は 5 月に実施した第 2 次調査区の東南側に位置し、道路を挟んで隣接した場所にあたる。調査区東南隅の土地境界杭を基準として、2 m 間隔で東南から北西方向に 1～4 区、北東から南西方向に A～C 区の方眼を設定した。10 月 16 日より調査を開始し、4 箇所のグリッドにおいて人力にて表土除去作業を行ったところ、地表面から 40 cm ほどでローム面に達したが、ゴボウの作付けや廃棄物による攪乱がひどく遺構は検出されなかった。遺物も全く出土しなかったためただちに埋め戻しを開始し、同日中にすべての作業を完了し調査を終えた。

西遺跡第 3 次調査

- (上) 土坑66 (北東より)
- (中) 土坑66出土土器
- (下) 集石土坑18 (北東より)



西遺跡試掘区②作業風景 (北より)



第5-17図 西遺跡第2次・3次遺構配置図、第2次19号住居跡出土炉体土器（左）、第2次土坑66出土土器（右）〈1/500・他〉

Ⅱ 考 古

○西遺跡第2・3次調査（文献62）

西遺跡第2次19号住居跡（第5－17図）

直径4 m50の円形で支柱穴は4本見つかった。床面の状態は軟弱であった。ほぼ中央に地床炉が確認された。遺物は住居の中央北側から埋甕1個体（1）が出土した。

出土遺物は、隆帯脇にキャタピラ文を多用し口縁部と底部を欠く深鉢（1）である。

西遺跡第2・3次溝1（第5－17図）

確認面での平均幅は3 mでほぼ一定しているが、崩壊のため南西部でややふくらんでいる。深さは80～90cmで底面の幅はおよそ2 mで平坦である。用途、時期共に不明。覆土中より縄文土器片や石斧が出土した。

西遺跡第3次土坑66（第5－17図）

南北径1 m10、東西径1 m、深さ28cmの円形。覆土中より縄文時代中期の深鉢1個体が破損した状態で出土した。無文の口縁部で口唇部に小突起が付く勝坂式後半の深鉢（2）である。

西遺跡第3次土坑67（第5－17図）

南北1 m、東西1 m90、深さ20cmの瓢箪形。底面に近い覆土中から石斧1点が出土した。

西遺跡第3次集石土坑18（第5－17図）

南北径1 m05、東西1 m、深さ26cmの円形。覆土中全体に礫が混入していた。また中央付近で炭化物がまとまって出土した。